㈳日本油空圧工業会発行：機関誌『油空圧』抜粋

愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行

写 紀 行

愛 写 紀 行 (2)

愛 写 紀

愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行

三 浦 吉 成

ずいひつ

訪欧写真紀行－その2－

＊＊＊ハノーバーメッセ'97欧州視察団と共に＊＊＊

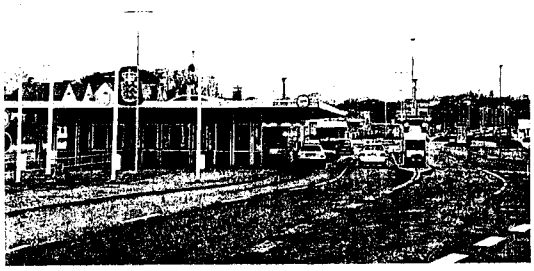
三　浦　吉　成*

この度，図らずもハノーバーメッセ'97欧州視察団にお供してヨーロッパ4カ国を訪問する機会を得ることができました。

日程と訪問先は表に示すように4月17日（木）～26日（土）の10日間で訪問国としてはドイツ，デンマーク，ベルギーおよびフランスでした。

前号その1（Vol.11 No. 3）ではハンブルグの自由研修までを記載しましたが，もう古い話となり記憶も薄れ，新鮮味に欠けていると思いますが，前回の－その1－で終わるのも無責任と思われせめて今回－その2－まで書いて決まりをつけるのが義務と思い，その後について貴重な紙面を費やすことをお許しください。

4月21日（月）4時半起床し，5時半バスにてダンフォス社のあるデンマークへ向かう。アウトバーンを走るバスの窓から見える田園は霜で白んで見え，外は寒そうだ，空も漸く白んできた。7時に車内でランチボックスの朝食を済ませた頃，前方にどんよりした北欧特有の鈍色（にびいろ）の空が見えてきた。バスの上は青空が広がっており，見渡す限りの田園風景の彼方には，風力発電用のあのスマートな風車が点在しているのが見える。



デンマーク国境検問所

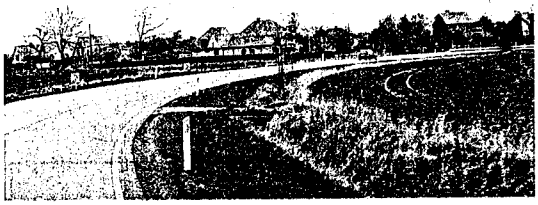
ハノーバメッセ'97欧州視察団日程表

日次	月日（曜）	発着地／滞在地	発着現地時間	交通機関	視察および見学先・宿泊ホテル
1	4月17日（木）	成田発 パリ着 パリ発 ハンブルグ着 ／ドイツ	12：00 17：20 19：50 21：20	AF-275 AF-1508 専用バス	空路，パリ経由ハンブルグへ （ラディソンサスブラザホテル/ハンブルグ）
2	4月18日（金）	ハンブルグ ハノーバー ハンブルグ	終日	列車往復	ハノーバメッセ'97視察 （ラディソンサスブラザホテル/ハンブルグ）
3	4月19日（土）	ハンブルグ ハノーバー ハンブルグ	終日	列車往復	ハノーバメッセ'97視察 （ラディソンサスブラザホテル/ハンブルグ）
4	4月20日（日）	ハンブルグ	終日		自由研修・休養
5	4月21日（月）	ハンブルグ アルス/デンマーク ハンブルグ ハンブルグ発 ブラッセル着 ／ベルギー	5：30 9：00 16：40 17：55	専用バス SN-436	ダンフォス社見学 （9：00～12：15） （シェラトンブラッセルズホテル/ベルギー）
6	4月22日（火）	ブラッセル ゴッセリー ／ベルギー ブラッセル発 パリ着	8：00 17：15 18：10	専用バス AF-2991 専用バス	キャタピラー社見学 （9：30～12：00） （ドゥ・ルーブル・コンコルドホテル/パリ）
7	4月23日（水）	パリ	終日	専用バス	INTERMAT'97 パリ国際土木建設機械見本市視察 （ドゥ・ルーブル・コンコルドホテル/パリ）
8	4月24日（木）	パリ	終日	専用バス	INTERMAT'97 パリ国際土木建設機械見本市視察 （ドゥ・ルーブル・コンコルドホテル/パリ）
9	4月25日（金）	パリ発	10：30	JAL416 （AF-276より変更）	空路，帰国の途へ （機内）
10	4月26日（土）	成田着	9：15		解散

る。

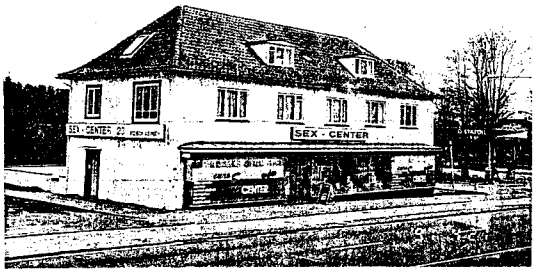
7時45分デンマークの国境に入る頃には小雨模様であった。国境と言えばバスの運転手が降りて事務所へ行き警備員と二言，三言話して戻って来て直ぐ出発といとも簡単，これがEU統合の成果の現われでしょう。検問所を無事パスしてデンマークの田園風景をしばらく行くと道路沿いに

＊㈳日本油空圧工業会



バス車窓からのデンマーク田園風景

市庁舎中央にそびえる鐘塔（高さ96M　ブリュッセル）

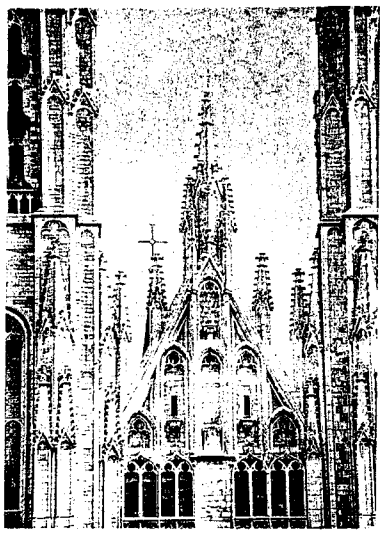


高速道路沿いにあるＳＥＸ ＳＨＯＰ（デンマーク）

ＳＥＸ・ＣＥＮＴＥＲと書かれた看板の建物が目に入った，これは日本ではさしずめ“大人のおもちゃ”の店でしょう，それにしても道路沿いに堂々とあるところは文化の違いか，日本では最近郊外にホワイトハウスのようなパチンコ店がよく見られるが。８時半心配したラッシュにも逢わずほぼ，予定通りダンフォス社に到着。（同社の見学内容については既刊の別途報告書参照）同社ではデンマーク料理の昼食をご馳走になり，慌ただしいスケジュールでしたが，12時15分には次に予定のベルギーに向かうためハンブルグ空港へと出発した。18時頃ブリュッセル／ベルギーに着き，バスでブリュッセルシェラトンホテルに入り，20時全員で夕食に出かけた。夕食は添乗員の杉浦さんのお薦めの“シェ・レオン”でベルギービールとベルギー名物ムール貝の料理をたっぷり味わった。ムール貝は３種類の味付けで鍋と言うか洗面器のような器に入れて運ばれてきた，結構美味だったと思った。旅行案内誌などで紹介されている有名な店なのか流石に日本人のグループが多い店であった。夕食後皆でグラン・プラスの広場へ散策に出かけた。シェ・レオンから約250メートル位歩いた所にあり，これは現存する中世の広場の中で最も素晴しい広場の一つと言われており，約8,000平方米の広さで，それを囲んで市庁舎，王の家，ギルドハウスが並んでいる。市庁舎の外壁のレリーフは素晴しい。夜間22時以降はイルミネーションで飾られ，音楽に合わせて色が変化する素晴しい光景で，空を仰ぐと満月が煌々と輝き美しいこの情景を一段と印象深いものとしていた。観光客や近所の人達が大勢見物していた。三脚を持ってこないことを後悔した。

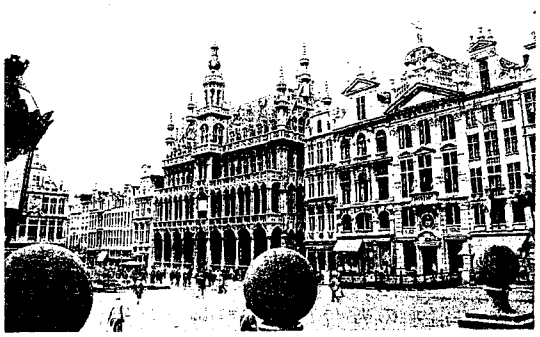
シェ・レオン（ブリュッセル）

翌日４月22日６時半初めてモーニングコールで起床，空調の音が耳についてなかなか眠れずつい



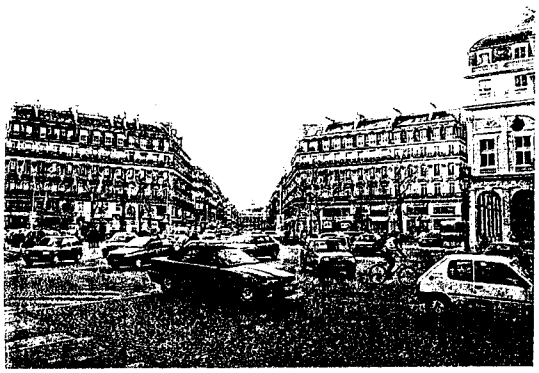
某教会（ブリュッセル）

小便小僧（ブリュッセル）



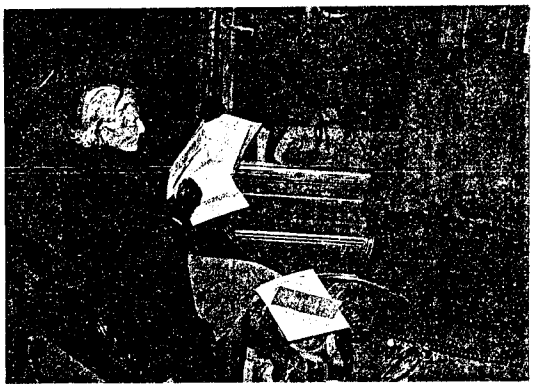
グランプラス（ブリュッセル）

に朝となり，うとうとしていた時だ，空調を止めれば良かったと後悔した。8時，今日の訪問先ゴッセリーにあるキャタピラー社へ向かう，予定より少し早い9時に到着。12時15分同社をあとに再びブリュッセルのホテルに戻る。この後，最後の訪問地であるパリに向かうが，飛行機の時間までブリュッセル市内見物に出た。まず，かの有名な小便小僧（17世紀に鋳造された「もっとも年をとった市民」として人気者）の像を見に行った。その後時間まで市内の一部を散策しさぞ名ある建物と思われるヨーロッパ風の旧い建造物をいくつか概観を眺め，前を通りましたがどこをどう歩いたかは記憶にない，なんとも情けない限りである。



ホテル・ドウ・ルーブル前の光景
（正面奥のドームはオペラ座）

ウインドーショッピングする女性（ブリュッセル）



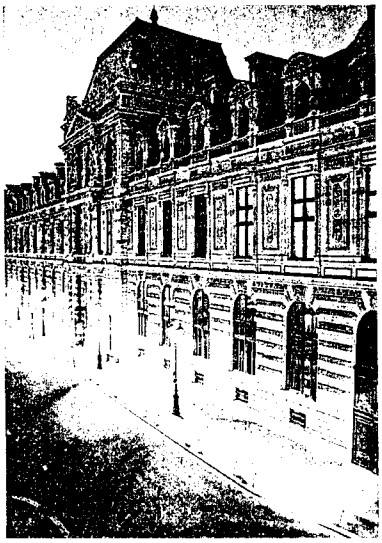
ホテルの老婦人

これはあくまで観光旅行に来た訳ではないのでただ漫然と歩いているに過ぎないことも一因と思われる。でも，ただ漫然と歩いているわけでもないことは，人通りの少ない，とある薄暗い裏通りで一人の若い女性がウインドーを覗いている光景に曳かれ思わずファインダーを覗いて2カットをものしました。この気持ちはいつまでも持ち続けたいものだ。

17時15分ブリュッセルを発ち18時10分パリに着き，バスでホテルに向かった。ホテルはかって福沢諭吉も泊まったと言うドウ・ルーブル・コンコルドホテルで正面にオペラ座が見え，道一つ隔てた隣にルーブル美術館があり，落ち着いた雰囲気の感じの良いホテルでした。

添乗員の杉浦さんがチェックインの手続き中ロビーの片隅に，古色蒼然とした応セットに一人の老婦人が書類に目を通している光景が目に入った，周囲の雰囲気とマッチした情景に何とも言えない感激を覚え思わずカメラのシャッターをきった。

ホテル・ドウ・ルーブルの夜景

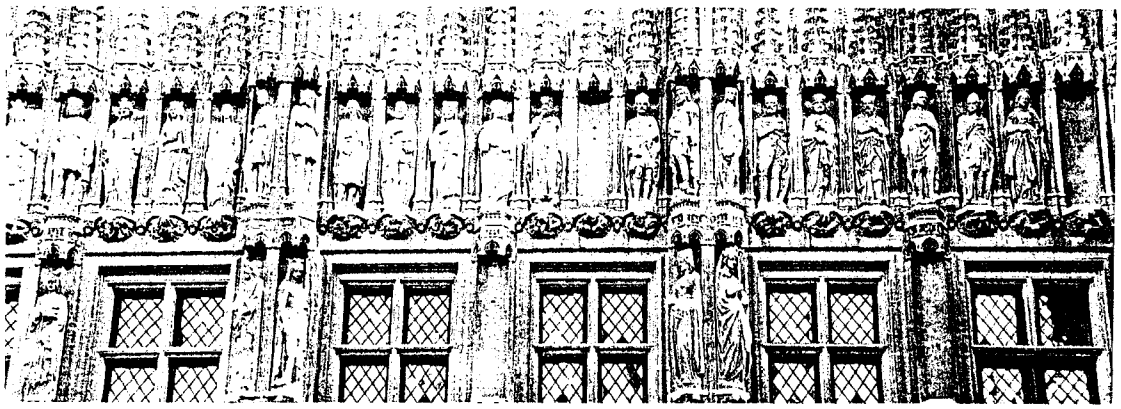


ホテルの窓から見たルーブル美術館の夜景

それぞれ部屋割にしたがい三々五々部屋に入り一息入れたあと，みんなでホテル近くの中華料理店“皇帝”で夕食をとった，どんなメニューであったかは既に忘却の彼方。

23日（水）INTERMAT '97パリ国際土木建設機械見本市を視察のあと，オプショナルツアーでパリナイトツアー・ディナーショーに参加し，花の都パリの夜に“リド”（シャンゼリゼ通り）のショーを見に行った。折角パリに来たことでもあり，もう二度と来られないかも知れないと思い，まさに清水の舞台から飛び降りる思いで大枚35,000円（送迎バス，夕食，シャンペンハーフボトル付）を払う決心をした訳です。“リド”では夜8時に入場し，夕食をしながら舞台では前座の楽団演奏を聴いたり，ダンスを見たりしながら10時からの本番の豪華ショーまで時間を費やす訳です。前座のダンスタイムには観客も自由に参加できるので，腕いや脚に自信のある方は結構楽しく踊っていました。やはり西洋人は素人でも絵になります。中には日本人の団体さんの国際的なおばさんも何人か結構がんばっていました。チークしかできない身としてはちょっと羨ましさを感じた光景でした。

豪華ショーの本番を待つ間2時間シャンペンハーフボトルだけではとてももたず，追加，追加で本番の始まる頃には睡魔が襲い，結局肝心のショーは襲い来る睡魔と戦いながらの観賞となりましたが，それでも半分以上は観たと思います，



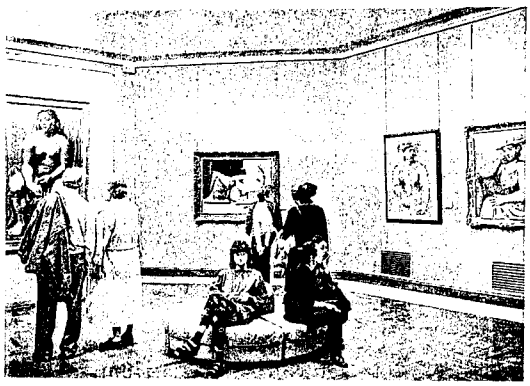
市庁舎の外壁のレリーフ

でもこれは一人私だけでもなさそうでした。何度も席に来る売り子から記念にと思いパンフレット（60フラン）を買って不足を補うことにしました。流石に日劇では見られない世界的な豪華ショーと華やかな雰囲気は十分満喫しました（残念ながら写真撮影禁止のためお見せできない）。

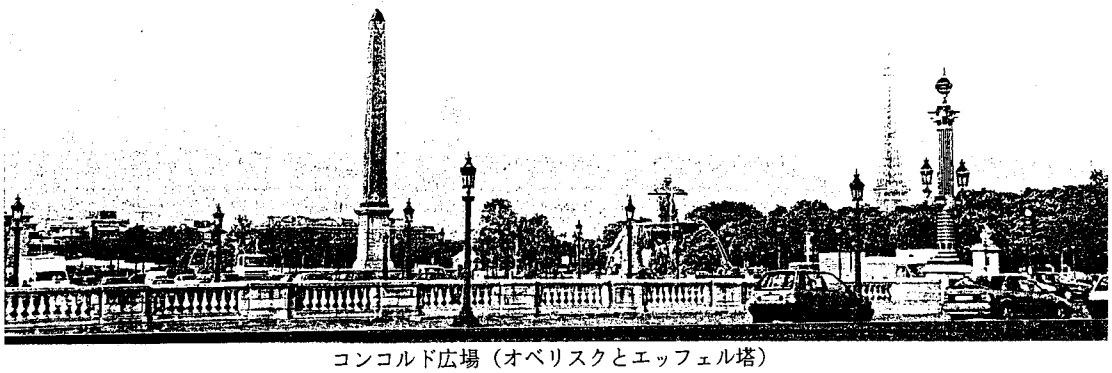
24日（木）欧州視察団の旅も，はや明日にはパリを発ち帰国する頃になり，手軽にパリ市内を見学するため，午前中には，オプショナル・ツアーのパリ半日市内観光バスを利用することにした。これはエアーイヤホーンによる日本語のガイド付で都合が良い，コースは主なところでは，コンコルド広場（世界で最も美しい広場とフランス人は誇る，中央にエジプトのルクソールからもってきたオベリスクがそびえそれを挟んで2つの噴水がある），シャンゼリゼ通り（シャルル・ド・ゴー

オランジュリー美術館内の幼児

ノートルダム寺院



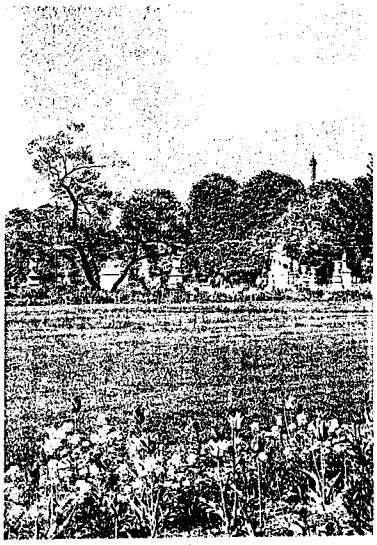
オランジュリー美術館内の光景



コンコルド広場（オベリスクとエッフェル塔）

オルセー美術館前の風景

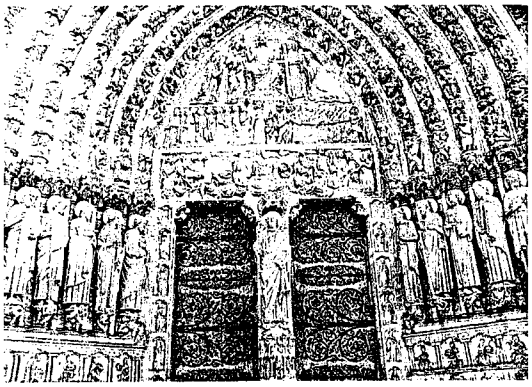
チュルリー庭園



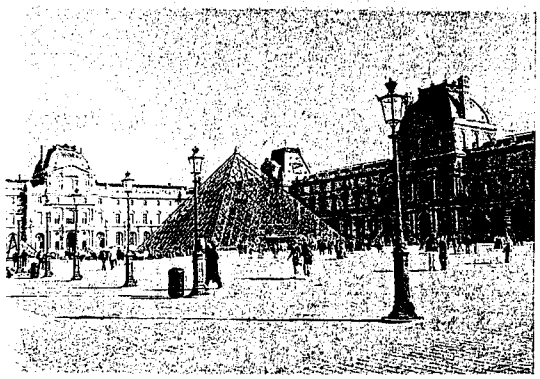
チュルリー庭園の花

マロニエの花

ル広場からコンコルド広場に至る幅70m，長さ2kmの大通り），凱旋門，エッフェル塔，ノートルダム寺院（フランス・カトリック信仰の中心，ゴシック建築の傑作）などでした。午後は，添乗員の杉浦さんの案内で平野団長とパリの裏町のレストランで海鮮料理の昼食を済ませたあと，オランジュリー美術館（モネの大作点“睡蓮”のほかルノワール，セザンヌ，ユトリロ，ロートレックの



ノートルダム寺院の外壁レリーフ



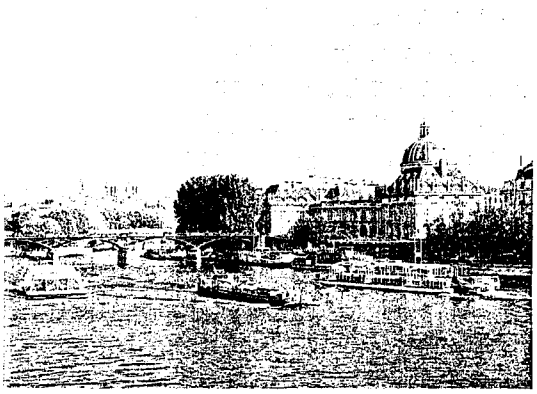
ルーブル美術館前の広場

作品を主に所蔵），オルセー美術館（旧駅舎を改造した19世紀の建物，印象派美術を中心に展示されている）を見学したり，チュイリー公園（17世紀に造園家ル・ノートルが設計したフランス庭園で花の都パリの美観を代表する庭園），再びノートルダム寺院などセーヌ河岸を散策した。きょうは秋晴れの暑いぐらい好天気で，セーヌ河の辺りには若者が上半身裸で日光浴をしている光景が目を射る。

25日（金）10時30分　パリ発　空路日本へ

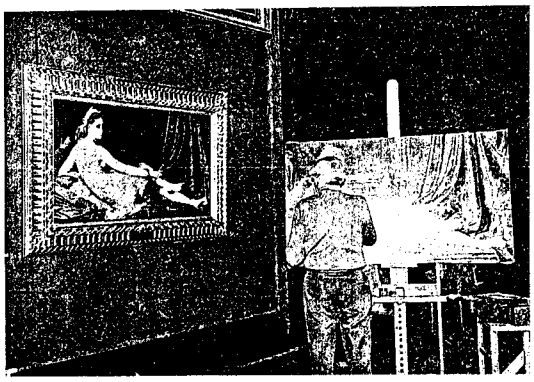
いよいよ最終段階，視察団全員何事もなくきょうを迎えホットしました。事前に聞いていた海外旅行におけるトラブルの数々，お陰様で私の知る範囲では何事もなく帰国することができました。ただ1件，あとで聞いた話ですが，パリ市内でのことA社のaさん，bさんが連れ立って歩いていてaさんが背後に異変を感じたので見ると尻ポケットに入れた財布がないのに気付いた時，後ろにいた男が財布を返してくれたとのこと。その男が何か言った，多分，用心しないとこうゆう風にスラれるよと。この男が本物の“掏摸”だったのか，親切すぎる男だったのかどうかはいまだに定かではない。それにしてもaさんは運が良かった。

パリを発つ日，きょうは何が何でもルーブル美術館だけは観て日本へ帰ろうと，早朝の散策と朝食を済ませルーブル美術館の特徴あるピラミッド形屋根の入口にならんだ。なにしろ時間がないので，世界的な名画，彫刻の数々をゆっくり鑑賞することができないのが非常に残念でもあり，失礼にあたると思いながら駆け足で回った。とくにかの有名なここでは必見の「ミロのビーナス」とダビンチの「モナリザ」の絵はちゃんと展示場所を示す案内があちこちにあり，便宜を図っている。両者とも昔日本で観たときは，何時間も屋外に行列しやっとの思いで中に入れば押し合い，へし合い，背伸びをしながら，係員からは立ち止まらず早く進んで下さいと言われ，やっとの思いで観たと言うより前を通り過ぎたと言う感じだったこと



セーヌ河

ルーブル美術館内の光景



ルーブル美術館内の光景（模写する人）

を思い出した。それに引き替え，きょうはそれらの前には観る人はわずか数人しかいない，係員もいない，ロープも張っていない，ガラス箱にも入っていない（ただし，モナリザだけは別でガラス箱に入って手の届かないところにある），手を出せば，昔美術の教科書や本でしかお目にかかれなかった世界の名画，彫刻が直に触れられる距離で好きなだけいつまでもゆっくり観たり，模写したり，写真撮影（ただし，フラッシュは禁じられている所もある）すら自由だ。これはきのう観たオランジュール美術館，オルセー美術館でもまったく同じ状況である。なによりも有難いのは拝観料が安いことです。ルーブル美術館で45フラン，その他でも30とか39フラン程度で，これではいつでも誰でも気安く行けるわけです。

今度の訪欧で文化の違い，豊かさの違いを痛切に感じたのは美術館でした。とくに，少人数の小学生グループが絵画や彫刻の前に座り込んで先生あるいは美術館員の説明を熱心に聴いている光景や未就学の子供連れの親子の姿などよく目にしましたがまったく羨ましい限りの文化的環境だと思います。子供の頃からこれらの世界的な芸術作品を特別なものとしてではなく自然に，自由に親しめるこれは歴史と伝統に培われた土壌の違いからくる仕方のないことでしょう。絵画，彫刻単独では日本にも世界に誇れる優れたものは沢山あるわけですが。

その他パリで気のついたことは，ホテルで朝5

ピカソの絵（オランジュール美術館）

時ころ目覚めると，外がうるさいので窓を開け下の道路を見ると，はや清掃車が来てゴミの収集を終り，散水していました，したがって，人が活動する頃には街の中のゴミはすっかり片付いてきれいになっているわけです。日本では，ゴミ袋の山を見ながら通勤しており，時にはカラスが道いっぱい撒散らかし，悪臭を放っているところを通ることもある。どちらが良いか自ずから明らかだが，つい最近テレビで知ったが，日本でも大阪市，福岡市ではカラス対策で早朝の3時～4時にゴミ収集をはじめたとのこと。東京でも是非やってもらいたいものである。どんな障害があるのか。

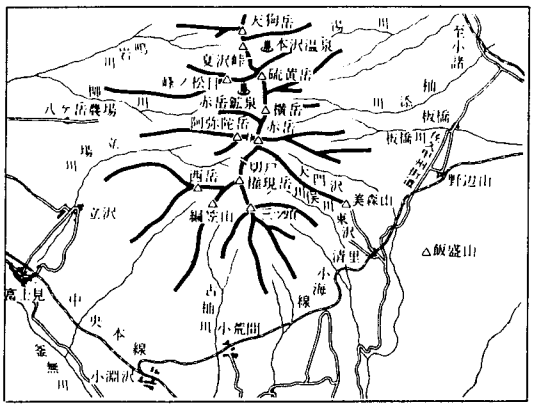
もう1点，市内の公共の建物ではほとんどフランス国旗が見られる，とくに祝祭日でない普段の日にもです。これは，フランスに限らず欧米では当り前のことでしょう。国民の拠り所となる国の象徴を生まれた時から常に身近に感じていることは大切なことでしょう。日本でも必要でしょうが，過去の歴史を盾に，難しい思想的な問題を過剰に心配する一部の人々がいなくなるまで待つしかないのか，それとも衣食住でいまや超国際的な日本では日の丸だけを掲揚するのはまずいのでしょうか，如何。（了）

ずいひつ

八ヶ岳山行記

－標高2,240メートルにある赤岳鉱泉の桧風呂に曳れて－

三　浦　吉　成*



（深田久弥著「日本百名山」No.64八ヶ岳より借図）

今回の山行記は，大型台風の13号が沖縄を通過し，関東地方にも再び夏が戻った昨年の夏のことです。わが家のチビッ子台風も大阪へ去り，やっと落ち着きをとり戻したともあり久しぶりに山に行って見たくなり，以前から頭にあった，赤岳鉱泉の桧の風呂にでも入ってのんびりしてこようと思い立って出かけることにした。

日程は８月18日（月）～20日（水）の２泊３日にしました。普通では１泊２日で十分だと思うが，歳を考え余裕を見てゆったりスケジュールとした。なにしろ，年々指数関数的に衰える体力，脚力に合った登り方が要求されるのだから。この頃なら夏山のピークも過ぎそんなに人も多くないだろうと考えた。

行程は，

第１日(8/18)：ＪＲ茅野駅～美濃戸口～美濃戸山荘～赤岳鉱泉（泊）

第２日(8/19)：赤岳鉱泉～赤岩ノ頭(2656M)～硫黄岳(2760M)～台座の頭(2785M)～横岳奥の院(2829M)～地蔵仏～赤岳天望荘（泊）

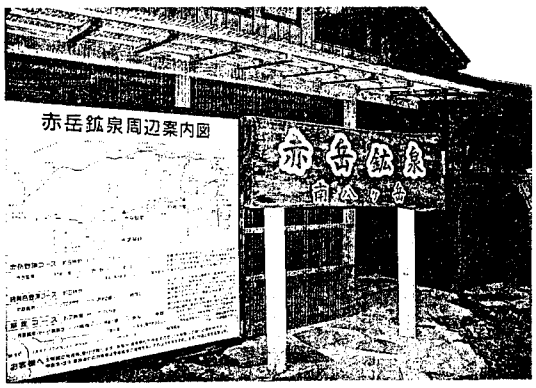
第３日(8/20)：赤岳天望荘～赤岳頂上(2899M)～中岳～阿弥陀岳(2805M)～行者小屋(2360M)～美濃戸山荘～美濃戸口～ＪＲ茅野駅

八ヶ岳は深田久弥著「日本百名山」では64番目に記されているが，赤岳を主峰としたいくつかの峰からなり，広大な裾野を広げたスケールの大きい山塊である。夏沢峠を境に北と南に分けそれぞれ北八ヶ岳，南八ヶ岳と呼ばれており，今回は後者の赤岳(2899M)を主峰とした岩稜の山で，深い樹林と苔の北八ヶ岳と大分違った趣きを呈している。

さて，出発の日13日頃からの冷夏のため涼しい夜が続き寝冷えのせいか若干風邪気味で咳，鼻水が出る，体調不十分であるがとにかくでかけた。急に決めたことで，今回も単独行となる。冷蔵庫の扉に予定表を貼って，妻には山の詳細を言っても理解できないので八ヶ岳に行くとだけ告げて出た。勿論事前に山行の話はしてあり了解を得ているが。

新宿発７時02分“あずさ81号”（臨時）に乗る，大月を過ぎると山の緑の濃さが目に染みる，空は雲が多いが雨雲ではなさそうだ。茅野駅に着いてからウエストポーチを忘れてきたことに気がついた，家を出るとき時間があったのでトイレに行くため腰から外してそのままリュックだけ背負って出てしまったのだ，最近物忘れや勘違いが多い気がする，妻に言わせれば“ボケてきたのと違う”となる。それはともかく中味は，カメラの備品，磁石，電池などで特に困ることはない大した物でなく良かった。茅野駅から美濃戸口まではバス，乗客はほぼ100％の満席だが，登山者は10数人程度，予想したとおり山は空いていそうだ。山小屋での鰯の缶詰め的寝床はご免だ。バスから見える八ヶ岳の山並みの上空は相変わらず雲に覆われて

＊㈱日本油空圧工業会



赤岳鉱泉

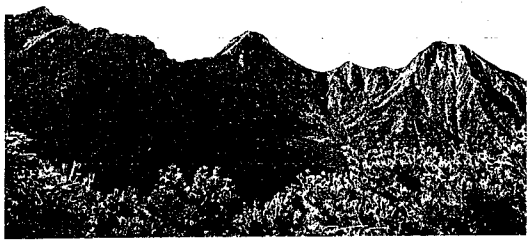
いる。バスの終点美濃戸口が八ヶ岳登山の起点となる，身支度，腹ごしらえを済ませ，登山届をポストに入れ出発。林道を進み約1時間ほどで美濃戸に着く，目前に阿弥陀岳が聳える。美濃戸山荘で一休みし，今晩の宿，あの桧の風呂のある赤岳鉱泉に向かう。2時間45分程ほとんど人に会わないうちに，行者小屋に出た。たしか赤岳鉱泉に向かった筈だったが何故か行者小屋に出てしまった。小休止し，地図で確かめたところ，美濃戸で左側の北沢に入るところを真直ぐ南沢を進んでしまったことに気がついた，これも思い込みでスタートした結果で今回の反省点である。一息入れて再び行者小屋をあとに赤岳鉱泉に向かった。山の日暮れは早い，空はもう薄暗くなりかけている，鬱蒼とした林の中を30分程歩いて3時40分待望の赤岳鉱泉に着いた。

宿泊の手続きを済ませ大広間に荷物を置いて，夕食前にひと風呂浴びることにした。噂どおり贅沢にも桧の風呂であるが，石鹸は使えないし，ふんだんにお湯を流せないが，汗を流し，さっぱりするだけで十分だ。

夕食は4時45分食堂ホールでみんな一緒にいただく，今日は客が少ないため交代制ではない。快適な小屋づくりに意欲的なオーナーの方針で，食堂や広間もゆったりしておりテーブルや椅子も木製でデラックス感がある。今晩のメニューはカレー＆海鮮鍋である。山小屋の食事で海鮮鍋は初めてである。これもオーナーが山小屋と言えども旅館やホテル並みに快適なサービスをとの意欲の現われでしょう，鍋は大変美味しく頂いた。山小屋の宣伝をするわけではないが，同じテーブルの中年の女性グループのひとりが，この小屋のことが先日ＴＶで紹介されたのを見て，是非行って見たいとの思いでやって来たのだと話していた。実はその番組は自分も見て知っており，今回八ヶ岳行きを簡単に決めた理由のひとつでもある。明日の朝食は5時半とのこと，もう一度風呂に入って寝ることにした。大広間に20人ほどの人がいたが，ゆったりとして，ゆっくり寝られた。個室はすでに一杯とのことであった。

2日目の朝5時10分起床，快晴無風の好天気。20分に朝食を摂り，6時5分硫黄岳へ向かう。赤岳鉱泉の前の登山道を大同心を見上げながらジョウゴ沢を渡って，尾根に出，針葉樹林の中をジグザクに登って行くと右手に硫黄岳の絶壁が見えてきた。やがて森林限界も過ぎ，ハイマツの尾根を登って行くと岩礫を敷き詰めたような平らな硫黄岳頂上にでる。頂上にはケルンが林立している。北側は爆裂火口の断崖，南側はジョウゴ沢の源頭斜面が切れ落ちており，ガスで視界の悪い時は危険で動けない。小休止し写真を撮る。

赤岳鉱泉の夕食　海鮮鍋＆カレー

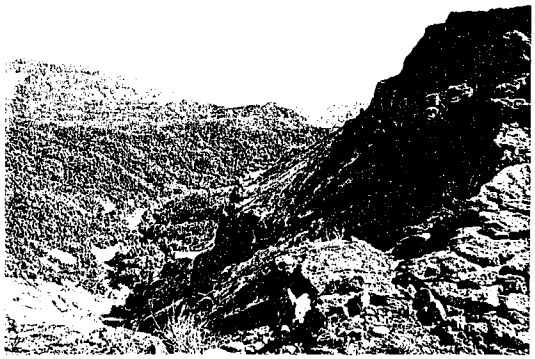


これから目指す赤岳を望む阿弥陀岳

赤岩の頭より　硫黄岳を望む

硫黄岳頂上

360度の眺望が実に素晴しい，いつものことながらそれまでの苦労はどこかへ行ってしまう光景だ。北面の眼下には縞枯山をはじめ，1昨年の秋に登った東西の天狗岳や泊まった山小屋の黒百合ヒュッテなど思い出の北八ヶ岳が一望できる（Vol. 10-No. 1掲載）。



硫黄岳爆裂火口　北八ヶ岳側

登路途中の鎖場

硫黄岳をあとにさらに進み横岳へ，これからは岩場が多く，梯子や鎖場をいくつか通るので注意を要するところであり，その代わり山登りの気分も味わえるところである。横岳頂上についたころはガスが発生し視界不良となる。さらに進み地蔵仏を過ぎたところに赤岳天望荘があり，丁度昼も過ぎており昼食でもとる積もりで休むことにした。場所を借りて持参のガスコンロでコーヒーとラーメンでも作ってと思い，丁度傍に休んでいたひとりの若者にも勧め，やおらリュックから取り出しセットするとき異変に気がついた。ガスボンベと

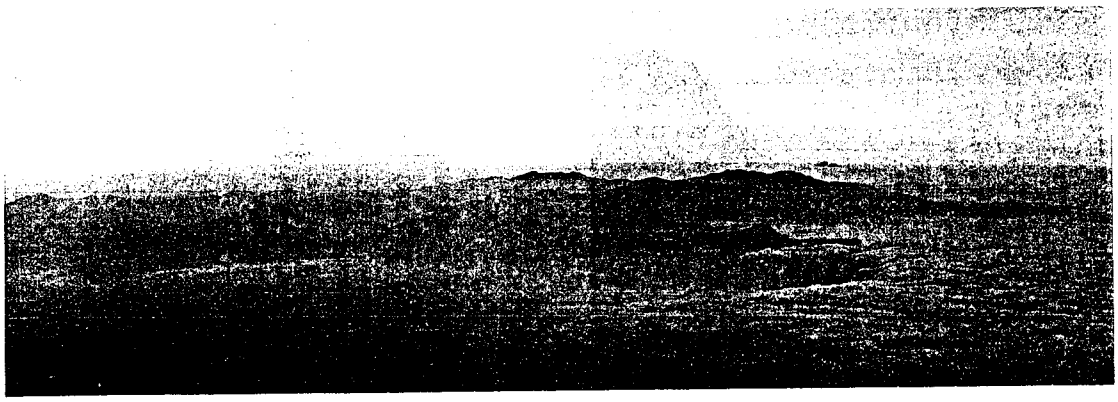
地蔵仏より赤岳を望む

赤岳天望荘

赤岳天望荘夕食　バイキング料理

バーナーのメーカーの違うものを持って来たため口金の方式が異なり使えないのだ。こんなものは互換性をもたせ共通仕様にすべきではないかと己の不注意を顧みずメーカーを恨んだ。若者には気の毒なことをした。今回の反省その2である。仕方がなく山小屋の食事をすることにした。小屋の貼紙を見ると，温水シャワーがあり，夕食はバイキングでワカサギの天ぷら，たらの芽の天ぷら，山菜の煮物，マカロニサラダ，トン汁など10品以上お変り自由とあった。外は相変わらずガスっており，この先赤岳へ向かっても視界が悪く眺望は期待できそうもないし，みんなここを通りすぎ赤岳頂上小屋を目指しているようだ，と言うことは赤岳頂上小屋は相当混むことが予想される。それならば，さっきの夕食のメニューも気に入ったし，時間的にはまだ早いが，急ぐ旅でもないのでここの方が客も少なく空いておりゆっくりできそうだと思い泊まることにした。可愛い受付けの女性が今は空いている時期とかで個室を普段の半額にしてくれた，小屋で働く若者の態度も良くサービスも満点。なお，ここの支配人は北原一三さんと言う方で，山の花にまつわるご自身の思いでや体験をまとめて“山の花旅”と題する小冊子を著わしておられ，面白そうなので花好きの妻への土産として一冊購入し，著者自身のサインをお願いしたら“愛岳，愛花”とマジックペンで書いて下さった。簡潔明瞭にお気持ちを表現した良いサインだと思う。私ならその後にまだいくつか“愛写”“愛○”“愛○”…となるのかな。夕陽を楽しみにしていたが相変わらずガスっていてついに見られず終い。5時45分夕食，はり紙通りのバイキングのご馳走，酒(真澄)の肴についつい食べ過ぎてしまった。

翌朝，4時45分に起床，快晴だが風冷たし，じっと東の空を眺めつつご来光を待つ，同じよう



眺望雲海から日が昇る

コマクサ

な人が何人か出ていた。雲海の下から見る見る姿を現わす太陽とその光を受け時事刻々と変化する周囲の光景はいつ見ても，なん度見ても素晴しい。朝食もやはりバイキング（10品）でした。朝食を済ませ赤岳目指して出発。赤岳を仰ぎ見ながら岩礫の斜面の登りとなる。7時20分赤岳頂上，360度の展望，北の方角には昨日歩いてきた硫黄岳，横岳の稜線や天狗，蓼科山が，西には御岳，乗鞍岳，木曽駒ヶ岳ほぼ真南の方向に富士山が雲の上に頭を出している。30分ほどいるとはやガスが出始めた。なぜか夕べの小屋に注文しておいた弁当を受け取るのを忘れてきたことに気がついた，800円損した。反省その3である。周りの人の話を聞いていると，やはり赤岳頂上小屋は宿泊客が多かったらしい，この小屋にせず正解であった。山行もやはり空いている時に限ると思った，誰かさんと一緒でないのがちょっと寂しい気もするが。

阿弥陀岳に向かう，南峰より梯子や鎖場や岩棚を注意しながら下る，結構急な岩場でスリルがある。約1時間程で中岳のコルに下り小休止，辺りの砂岩礫地には時期的に少し遅いが，コマクサが咲いている，盛りを過ぎているのがちょっと残念だが，でも（人と違って）花は愛らしい。阿弥陀岳には中岳のコルから，すぐに岩場の急登となるしまた戻って来ることになるので荷物を置いて空身（カメラと三脚は持っていく）で行くことにした。折角阿弥陀岳頂上に着いたが，ガスで正面の赤岳は見えず残念。登る途中の岩間，岩陰にひっそりと咲く数々の小さな花が印象的で慰めであった。花を撮りながら下る。いったん，さっきリュックを置いた所に戻り，行者小屋へ下る。ダケカンバ帯を通りシラビソの樹林帯を抜け，途中振り返るといま登って来た阿弥陀岳が大きい。11時15分行者小屋着，ふんだんに出る冷たい水で顔を洗い，口を濯ぎ，ラーメンを肴にビールを飲みながらこれで今回の山行も無事終了したとひとり感慨に浸る。あとは一路南沢を下り美濃戸山荘を経て往路を美濃戸口に戻り，14時47分のバスで茅野駅に着く。16時02分発のあずさ82号に乗る。この電車は臨時のためかガラガラに空いており，車中，残った缶詰を肴に，缶ビールと行者小屋で汲んできたミネラルウォーターで水割をつくり一人で宴会をしているうちに18時30分新宿に着き，旅は無事終了。

今回の山行は，体力，気力，脚力のチェックが目的であったが，一応合格としよう，また，こんどの山行ではできるだけ酒は飲まないようにしようと誓ってでたが，これも成功したと言えよう。発つ時の体調不良も山の霊気が癒してくれたようだ。しかし，忘れ物や思い違いなど反省点も目立つ山行だった。

赤岳阿弥陀岳眺望

愛写紀行

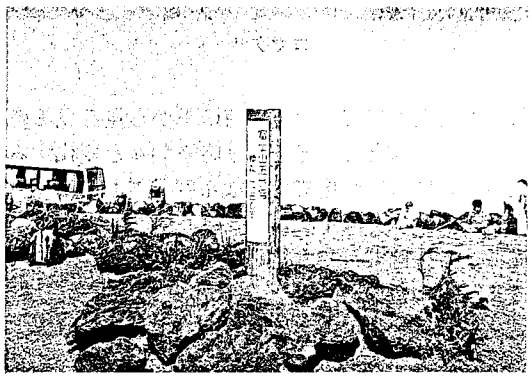
飲まず食わずの富士山登山記
－高山病？を初体験した山行－

三　浦　吉　成*

今年の夏は何かおかしい、夏らしい日差しがないまま８月も半ば過ぎようとしている。確か昨年の今頃は、台風13号が沖縄を通過している。今年は台風の発生が少なく日本への接近もほとんどない。そのかわり雨が多く欝陶しい日が続き、先週は福島や栃木で集中豪雨による災害が発生している。海の向こうでも中国はじめ世界のあちこちで異常気象による天候異変が起こっている。これも自然を破壊し効率を追及し続けた人類に対する天の竹箆（しっぺ）返しであろう。

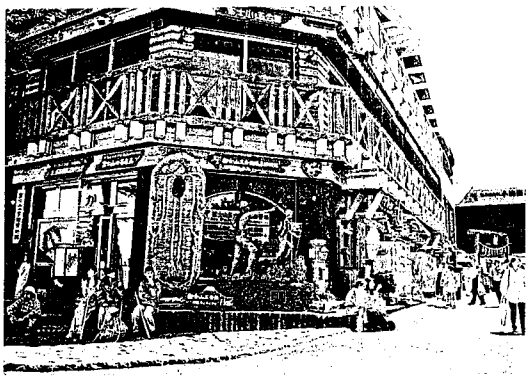
それはさておき、この夏は久し振りに北アルプスの穂高縦走のほか２、３の山行を計画し、同行してくれる友人を誘って同意を得ていたが都合により行けなくなったことを葉書で知らせてきたため家内の知るところとなったため、一人での山行は許して貰えない。いずれにしても、この夏の上高地は地震が多発し落石が多いようなのでやめにした。候補はいくつかあるが、さて何処に行こうかと雑誌を見ていると“富士山にでも行ってきたら”との声、おや！なぜか富士山なら一人でも行って良いらしく、富士山は登山と思っていない。一般的にもそうらしい。私自身、富士山は来年還暦記念登山の積もりでいたのだ、その旨を言うと今年はプレ登山で行けばとのこと。

この夏は天気も安定せず、雨の多い年で長期の山行は望めないと思われ、８月21日（金）～22日（土）の１泊２日で富士山に初挑戦することに決めた。この頃なら夏山のピークも過ぎそんなに人も多くないだろうと考えた。ピーク時に見られる、麓から頂上まで蟻の行列を思わせる登山者の列の一部になることは避けたい。はたして、年々衰える体力、脚力で3776mを無事登りきるか一抹の不安もあるが、山登りする者として、日本人としては一生に一度は登っておくべきだし、体力的には年々難しくなることは明らかである。一方、日頃の節制の成果を試す機会でもあり楽しみでもある。



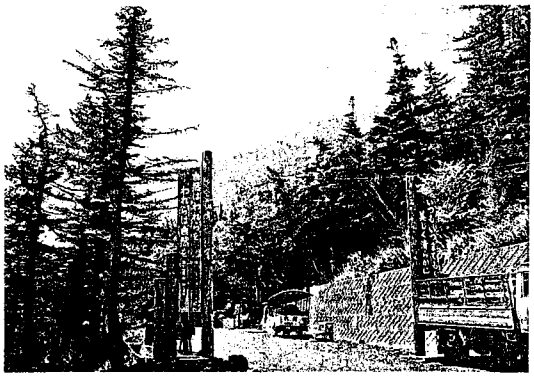
富士山五合目バス降り場

当日、６時起床まず外を見る、天気は晴れである。天候不順が続く中の晴れ、まさに晴れ男の面目躍如。前夜バタバタと支度を済ませ、あとは途中で食料と飲み物を補給すればよし。新宿西口７時45分発の予約しておいた中央高速バスに乗り、河口湖五合目へ向かう。バスの中で、３人連れの



富士山五合目土産物店風景

*㈳日本油空圧工業会



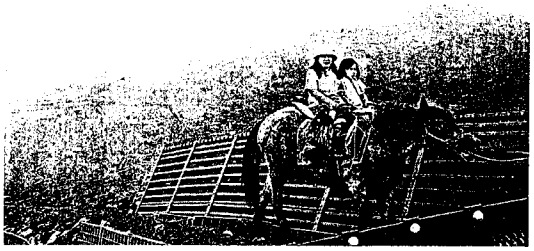
富士登山道入口の木柱

砂礫の中に咲く草花

学生さんが話していたのを聞いていると、富士山がなぜここに（山梨、静岡）あるのか、もっとほかの地方、例えば四国や東北などにあったらもっと良かったのではないかと他愛のない会話ですが、なかなか発想が面白いと思った。我々では絶対にそんなことは思いもつかない、現状が最適と思っている。

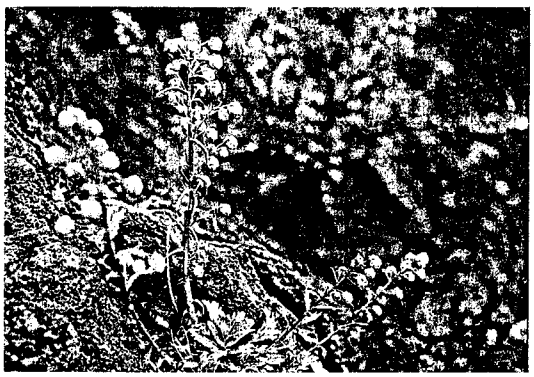
10時予定より10分程早く着いた。バスを降りると五合目の広場には、大きな土産物店、食堂、近代的なレストラン、ホテル、山小屋などが立ち並びこれから登る人、下山を終え休憩する人などが入り混じって賑わっている。良く見ると、老若男女のグループ、家族連れなどが目立つ、また結構若者や外人が多い、なるほど一般の中高年者の多い山とはちょっと違った雰囲気がする。

富士山は深田久弥著「日本百名山」では72番目に記されている。“富士山”これほど多くの人に知られ、多くの賛美者を有し、古来霊峰富士として信仰の的でもあり、日本の象徴でもある。また



馬で登る親子連れ

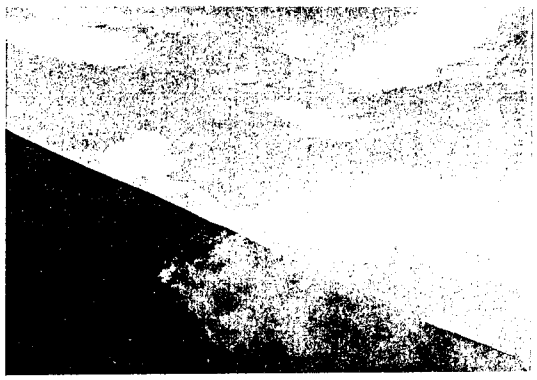
これより右手へ富士登山開始



七合目附近に咲いている花

大昔からその麗しい四季の風情については諺や詩に、歌に、絵画に描かれ、多くの写真家に撮られ、小説に書かれた作品は枚挙に暇がない。とくに冬は白妙の雪を覆ったその山容は神秘的でさえあり、人間の心を無にし、ただ呆然と仰ぎ見るのみである。自分も富士山の素晴しい写真を撮りたいと

七合目附近に咲いている花

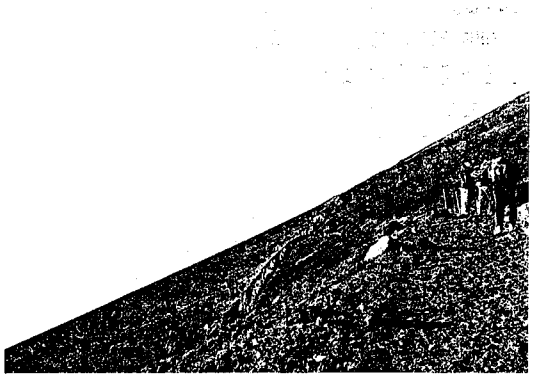


美しい稜線

防護壁

常々思っているが、いまだ機会を得ないでいます。東西南北どの方向から見てもほぼ同じに見える、末広がりの美しい安定した姿は日本人の好む形と言える。どこから見ても同じに見える“八面山”と呼ばれる山は日本でもいくかつあるが、これだけの標高差を一つの曲線で形づくられ、かつ眺望できる雄大な山は世界中を探しても無いかもしれない。ものの本によると、富士山は633年に役ノ小角によって登頂され、人間がこんな高い山へ登ったのは、これが世界最初となっている。また、富士山にたいして富士の字が初めて使われたのは「続日本記」（781年　桓武天皇）からとのこと。

日の出（八合目の小屋より）



稜線を行く登山者

要塞を思わせる頂上を望む

火口（剣ヶ峰方向）

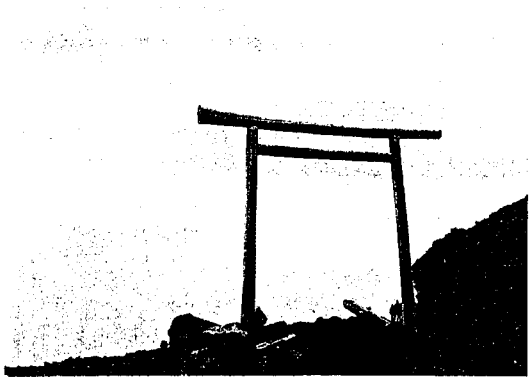
剣ヶ峰に立つ富士山測候所を望む

現在、富士登山のルートは、河口湖口、須走口、御殿場口、三島口、富士宮口の五つがある。いずれも五合目（新五合目）までバスがあり、そこから頂上まで4時間半～6時間半で登れ、下りは2時間半～3時間となっており、健脚ならば日帰りも十分可能な山である。本来ならば富士吉田から富士浅間大社にお参りして身心を清めてから、白装束、白ハチ巻で「六根清浄、お山は晴天」を唱えながら、一歩一歩登るべきかも知れませんが、昨今の便利さと効率を追求する時代には富士登山も例外ではなく、上記のルートができ上がっている。かく言う私自身もその便利さを享受することにして、新宿からバスで1時間50分で五合目に着いた。

軽い、早めの昼食とトイレを済ませ、小御岳神社にこれからの道中の無事を祈願し、鈴のついた金剛杖（と言っても木の杖）を買い入れた、この杖に合目ごとにスタンプ集めよろしく焼印を押してもらうのが楽しみだ。10時40分スタート。五合目が標高2305mだからこれから標高差1461mを登るわけだ。いつものことながら、体調万全で山に向かうことは少ない。今回もそうだ、夏風邪が抜け切れず何となくスッキリしない。しかし、いつも感じるのはいざ、登る時点では、なぜか気分が高揚しそれなりに体調も良くなるようだ、これは山の霊気と自然が与える治癒力のお陰でしょう。晴れ気温25℃、風が涼しい。

五合目の山小屋、売店群から少し離れると、広い道の両脇に2本の木の柱が建っており、ここが登山道の入り口になっている。ここから右手に砂沢が迫っているお中道を行くさらに両側にダケカンバの繁る道をしばらく行き、泉ケ滝で右に進んで六合目へと行く。

六合目で吉田口と合流し、道もやや急な登りとなる。六合目（2390m）ではガスのため視界は悪く下界の景色は望めない、気温は20℃。山小屋で記念の焼印をして貰い（有料200円）、これからは砂礫の道をひたすら登って行くのだ。道の山側に



お鉢めぐり途中の風景

日本一高いところに立つ筆者

頂上から北アルプスを望む

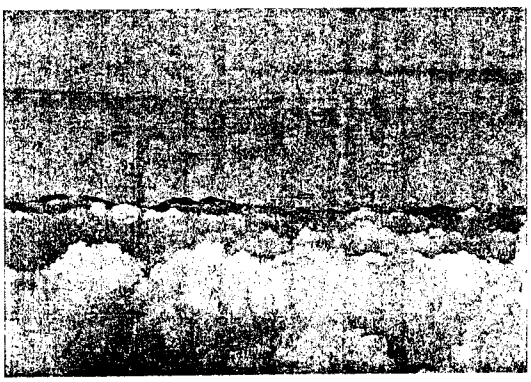
は安全のための防護壁がしっかりできており、それに沿ってジグザクに登って行けばよい。いつもの縦走登山では、登っては下り、また登り返しの繰返しでいくつもの山と谷を越えて目的の山頂を目指すのが普通である。その点頂上に向かってひたすら登るだけの富士山は山行自体は楽かもしれないが、道がジグザグなので、目標が目の前に見えていながら、なかなかたどり着かない点は苦しい。

六合目から1時間ほどで七合目（2700m）である。植生限界もすでに過ぎ、まったく赤茶けた砂礫と溶岩のみの世界である。七合目までは馬を利用しても行けるが、そんな気にはならない。外人や子供連れ、あるいは若いカップルが利用しているのに行きかう。風が強く、時々ガスの切れた瞬間に下界が覗かれる、気温15℃冷気が心地よく顔を撫でるが、何となく胸がむかつく。3時に本八合目（3250m）に着く、何だか気持ちが悪い、吐き気がする。この高度は私にとって初体験である。いままでは、北岳3192m、槍岳3180mの高度が最高で、3000m程度までは何度も経験しているが、こんなことは初めてである。二日酔いの激しい時に似ている、これが、話に聞く高山病と言うものだろうか？聞くところによれば、頭痛がひどく、気持ちが悪くなると言われているが、頭痛のほうは全く感じない。まさか自分がなるとは思ってもいなかったため、対策をしてこなかった。こんなことなら携帯酸素ボンベを持参すれば良かった。山小屋にも売ってはいるが、ここで買うと高度に比例して価格も高くなるし、ここまで我慢したことでもありこのまま通してがんばることにした。しかし、気分の悪さは益々激しくなる、頭痛も少しでてきた。とてもこれ以上進む気にならない、早く横になりたい。登路の脇に座りこんだり、うずくまったりしてまったく動けないでいる子供や若者や年配の人がいる、この人達も高山病に苦しんでいるのだろう。一方まったく平気でぐんぐん登って行くひとも大勢いる。なんとゆう不公平だろう。

4時富士山ホテル（3400m）に着く、ホテルと言っても単なる山小屋ですが、ここに泊まることにした。転がり込んだと言うほうが当たっている。あと1時間半～2時間程で頂上の筈ですが、調子が快復すれば、日の出前に頂上に着くようには早出することにしてゆっくりすることにした。。今日は小屋も空いている、4人部屋にひとりで泊まる。小屋の人の話では、明日は土曜日で満室とのこと。夕食のカレーはとても食べる気にならず、手付かずで返品した。夜中、休憩客、宿泊客の出入りが激しく、騒々しくほとんど眠られず。

翌朝、5時お腹が空いたので、うどんを注文したが、やはりろくに食べられない。依然頭痛と気持ちの悪さが直らない。もう山頂でのご来光は無理だ諦めよう。

5時半、気温10℃、山小屋を出る。6時半鳥居を越え、7時25分富士山頂上浅間大社奥宮のに着き参拝のあと杖に焼き印を頂く。鳥居を過ぎたころからまた、高山病が激しくなった。一休みするが、とてもビールで乾杯と言う気にならない。一服後、久須志神社をスタートし、時計回りに頂上の爆烈火口を周遊するお鉢めぐりに出かける、火口は思った程大きくはない、取り敢えず富士山測候所のある日本最高地の剣ケ峰（3776m）をめざす。相変わらず気持ちが悪い、途中、成就岳を過



頂上から北アルプス方向を望む

ぎたところにあるＮＴＴ山頂分室で登頂記念テレホンカードを買い、家に電話を入れ無事を伝える。流石に電話の繋がりは早く、明瞭だ。

最後の急登を吐き気を押さえながら漸く登り切り、日本最高峰の三角点に着く、日本にはここより高いところはないのだ、何という感激。遠く雲の上に頭を出している北アルプスが眺望できる。いつも遠くから憧れをもって眺めていた神々しい山、今ここに立っているのだ、何とも言えない。10時お鉢めぐりを終えたので、缶ビールをやっと飲む気になり、下山前にひと休みし、ビールを飲みながら感激を再び味わうことにした、しかし１本の缶ビール（350㎖）が飲み切れず大半捨ててしまった。

15分程休んで、10時15分下山する。10時40分小屋に着き荷物を受取った。丁度小屋にいた、きのうバスで乗合せた男性が話しているのを聞いていると、年が65才で富士山は５度目とのこと、いつも苦しいが、下界に降りると、また行きたくなり、またきて苦しい思いをすると言う。まったく元気のいい老人？である。また登りたくなると言う、その気持ちはなんとなくわかる。山に行く者は誰も同じかも知れない。ただ、富士山はどうかな、自分としては、やはり眺めるだけの山かな。来年の還暦登山はどうするか。下山は、私が20分程先に出たのに、途中あっと言う間に先ほどの老人？に軽く追い越されてしまった。高山病は、高度を下げれば回復するものと思っていたが、下山途中もずっと気持ちが悪く、２度ほど吐いた。

14時五合目に着く、まず、バスの予約を済ませてからゆっくりしようと思っていたが、予約は満席で、いますぐ出るバスは、下山が遅れている人がおり、空席があるとのことで仕方なく飛び乗り新宿に向かう。顔を洗う暇もなく、やっと気分も良くなり、こんどこそ美味しいビールでも味わおうと思ったがその時間もなく、すべては家に着いてからと諦め、車上の人となる。お陰で予定より早く帰れた。かくして、飲まず食わずの富士山登山は無事終えた。家に着いて風呂に入る前に体重をみたらほとんど減っていない、飲まず、食わずの成果はなし、サバイバル能力ありと自己満足。足腰はとくに問題なかったし、今では、なんとなくまた登りたい気がしている。ただし、こんどは高山病対策を万全にして。下る途中、長年愛用の登山靴（ザンバラン）の滑りが激しいので家に帰ってから見ると底がつるつるに減っていたので早速張り替えにだしたところ、ビブラム底だけでなく本底まで減っているとのことで結局底全部新しく張り替えて新品同様になった。これでは益々、是非再挑戦しなければと考えている。

これからは富士山を眺める時の気持が今までとちょっと違ったものとなるだろう。

（了）

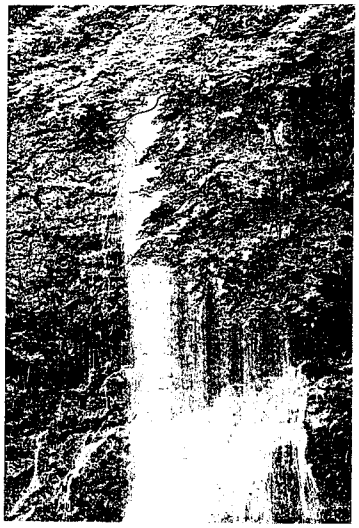
愛写紀行 12

関西の思い出の山々（その１）

三　浦　吉　成*

明けましておめでとうございます。恥ずかしながらまたまた書きます。この羞恥心のなさが恥ずかしいと思いながら。

昭和５８年１月から平成４年８月までの約１０年間大阪に住む機会を得た。事務所は中之島の朝日新聞ビルにあり、社宅が阪急電鉄の箕面駅から徒歩１０分ほど坂を上がった高台で山の中腹と言ったところで海抜１８０M位であろうか、社宅の北側は道路を隔ててすぐ山になっているが、南側はほぼ１８０°の展望が開け、ほぼ大阪全市と南港、東に奈良生駒山が眺望でき、とくに夜景がきれいで伊丹空港に着陸する飛行機の光跡や雷雨の夜の稲妻など飽きずに眺めていた。したがって、気温も下界より１～２度低く夏は非常に涼しく、ほとんど冷房なしで過ごせた。わたくし自身は住み心地良くほぼ満足しているが、しかし物事良い面ばかりではなく、駅や商店街は海抜８０M位のところであり、通勤、買い物にはいつも高度差１００Mほどの登り降りをしなくてはいけない。これが若い人には何でもないが、老人や体の不自由な人には大変である。実際、これを苦に社宅を引っ越して他所に行った家族も居られたとか聞いたことがある。娘などは足が太くなると言って嘆いていた。我々にとっても行き（下り）は良いが帰り（登り）が恐いで、酔っぱらって帰るときは辛いものがり、駅前からタクシー利用が多い。歩く時は家に着くまでに酔いが醒めてしまう場合もある。したがって、ここでは車か徒歩しか生活できない。自転車などはとんでもない、登りは押すしかなく、下りはブレーキが焼けてしまうため、普通のブレーキでは使えないのである。それでも普段はともかく冬など雪のあと道が凍結したらそれこそ大変である、とてもまともに歩けない。私



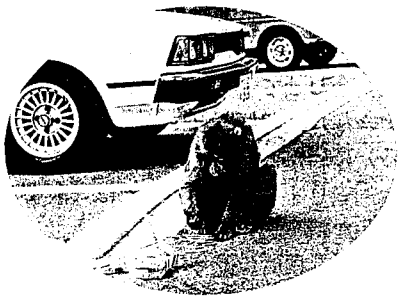
新緑の箕面の滝

自身赴任してすぐ、出勤のため社宅を出てすぐ道が凍結していたため、すってんころり仰向けに数メートルほど滑り、後頭部と尾てい骨をしたたか打ったことがあるが幸い大事なく済んだ、なかには怪我をした人もいた。お陰で足腰が多少鍛えら

紅葉で賑わう箕面の滝

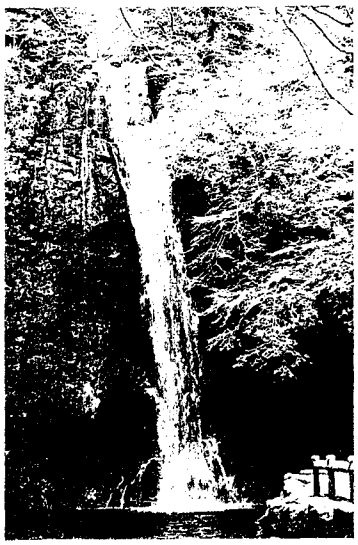
*㈳日本油空圧工業会

筆者の栗をとって食べる野猿

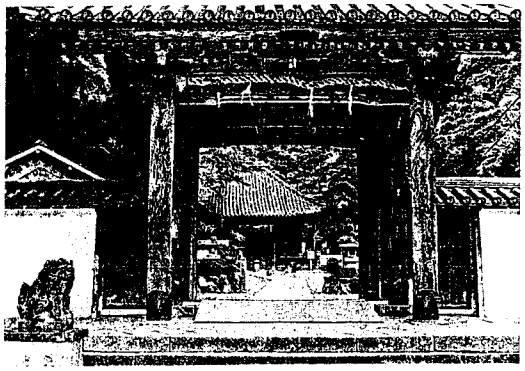


子供から菓子をとって食べる野猿

れたのかも知れない、いまでは感謝している。私事はこのへんにして、箕面と言えば、滝（落差３３M）と渓谷美で知られ、かっては頼山陽も訪れ感激の漢詩を残し、名勝の名を世に広め、野口



雪の箕面の滝



竜安寺山門

英雄が母堂とともに来遊されたこともある。とくに春のイロハモミジ、オオモミジの新緑、秋の紅葉のころは行楽客やハイカーで賑わう素晴しいところであり、また冬の雪の日はモノトーンの静謐な世界を見せてくれる。滝には社宅から３０分ほどで行けるため、格好の散策コースである。駅から滝までの途中には桂公爵別荘を見下ろす高台には、湧出量豊かな温泉やプール、見晴らしの良い高原スケート場もあり、また滝への渓谷沿いには、昆虫館や６５８年頃に役の行者（神変大菩薩）により創建された修験根本道場でもあり天皇の祈願所でもあった竜安寺がある。なお、竜安寺は日本最初の弁財天を祀り竹生島、江の島、厳島とともに日本四弁財天のひとつとなっている国宝級の古刹で、そこではかって、行基、空海、日蓮、法然等々の高僧が修行されたと言われる。また、毎年行われる開扉式と閉扉式には京阪神から修験者（山伏）が集まり、護摩を焚いて行われる儀式は壮観である。また箕面山は野猿の生息地でもあり、

竜安寺修験道場戸開式（京阪神の山伏が集まる）

箕面天上ケ岳(510)に建つ役の行者像
（ここから昇天したと言われる）

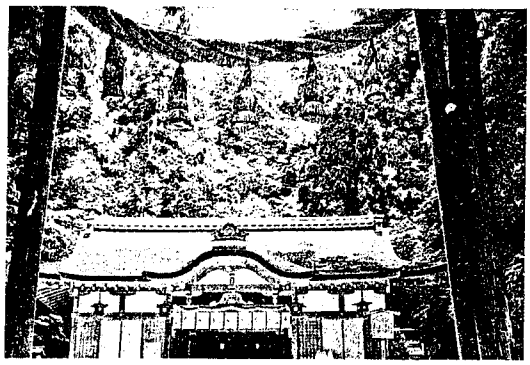
時にははぐれ猿（さしづめ仲間からはみ出したホームレス猿）が餌を求めて社宅のベランダに現れ、住人を驚かすこともある。あるとき一人で箕面の山を歩いているとき、猿の群の居住地に紛れ込んだことがことがある。数十匹の猿の群れに一斉に見つめられたときは一瞬異様な感じで、恐怖心すら覚えたことがある。手にはカメラだけで、餌と思われるものはなにも持っていないのが幸いし、なんとかその場を逃れることが出来た。また、あるときは折角山から採ってきた栗を突然出てきた猿に一瞬にして持って行かれたことがある。
さらに箕面は昭和４２年１２月に明治１００年を記念して、東京の高尾山と共に明治の森国定公園に指定されており、さらに高尾までの東海自然歩道の起点（終点）となっている。ここでなにも箕面をＰＲする義理はないが話の取っ付きとしてご容赦下さい。こう言うところに住む機会を活かし箕面を起点に関西の山々や京都、奈良の神社仏閣、史跡などあちこち写真を撮り歩いた。機会があればこれらの紹介もしてみたい。

今回は今まで何回か寄稿した山行記と違って大阪在住の折に登った魅力的な山々をおぼろげな記憶をもとに辿ってみる。大阪での山行もはじめのうちはひとり歩きが多かったが、暫くして”やちょうの会”なるグループに仲間入りしてからグループで頻繁に行くようになった。”やちょうの会”とは奇妙な名称だが、漢字を充てればさし詰め”夜蝶”となる、なんとなくイメージは感じられると思います。これはもともと飲み仲間の集まりで、ある日飲んでる席にでた話で、毎夜のように飲んでばかりいてはあまりにも能が無く、体にも悪いとの反省から、誰かの発案でせめて休日くらいは山野を歩いてきれいな空気を胸いっぱい吸って、気持ちよい汗をかいてアルコールを抜いて体にいいことをしようとの思いからスタートしたグループ活動ではあったが、酒、ビール、ウイスキー等々持参し山頂や山小屋での宴会あり、下山すれば駅前で反省会ありで結局何のことはないアルコールとは縁が切れず、場所を変えて飲んでるに過ぎないのだが、それでも何もしないで飲むよりはいくらか体のためにも、精神的にもプラスにはなっていると信じている。このパターンはいまだに変わらない。この”やちょうの会”も最盛期には男女合わせて十数人（基本的にはオープンなシステムなため開催ごとにメンバーは異なることがある）は居たと思うが、転勤、出向及び転籍などで一人去りふたり去りで今では大阪支店には女性数名しか残っていないようだ。男性は九州、大阪、東京の３箇所に散らばってしまった。それでも何度かは九州と大阪、大阪と東京の仲間が合流して山行を行っている。

さて、思い出に残る主な山行を挙げる（順番に意味はない）と六甲山（931）/神戸、雪彦山（せっぴこさん　915）/姫路、大台ガ原＊（1695）/三重、御在所岳（ございしょだけ　1212）/三重、大山＊（だいせん　1729）/鳥取、氷の山（ひょうのせん　1510）/兵庫、比良山系の山々/滋賀、竜ヶ岳（1100）/滋賀、伊吹山＊（1377）/滋賀、霊仙山（りょうぜんざん　1098）/滋賀、武奈ガ岳（1214）/滋賀、金糞岳（かなくそだけ　1314）/滋賀、大和葛城山（やまとかつらぎさん　959）/大阪、南鈴鹿（800）/滋賀、稲村ヶ岳（726）/奈良、金剛山（1125）/奈良、高見山（1248）/奈良、三峰山（みうねやま　1235）/三重、峰床山（970）/京都などがある。そのほかいろいろあるが、ちょっと変わったあまり誰もが登ったことのないと思われる山として三輪山/奈良（みわやま467）がある。この山は、山辺の道（日本最古の道/奈良～天理～桜井の35Ｋｍ）のあの三輪そうめんで有名な三輪にある大神神社（おおみわじんじゃ）のご神体となっている。山頂には大国主命が鎮座し、頂上からは、畝傍山（うねびやま）、耳成山（みみなしやま）、香

大神神社社殿

三輪山入山口の筆者と友人（三輪山登拝証のタスキ）



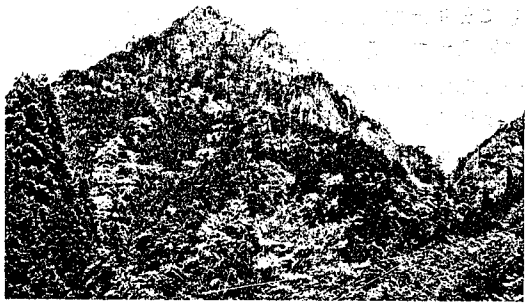
三輪山前の社

具山（かぐやま）の大和三山が一望できる。この山は神の宿る山であり、麓の社務所でお祓いを受けた後、三輪山登拝証と書かれたたすきを掛けてもらい心身ともに清くしてから登ることが許される。心身ともに清くなれない人は許されない。また、撮影禁止のためカメラの持ち込みは許されない。山中は昼間でも薄暗く、樹木の鬱蒼とした不気味なくらい静かな山である。いかにも神宿る山に相応しいと感じる。

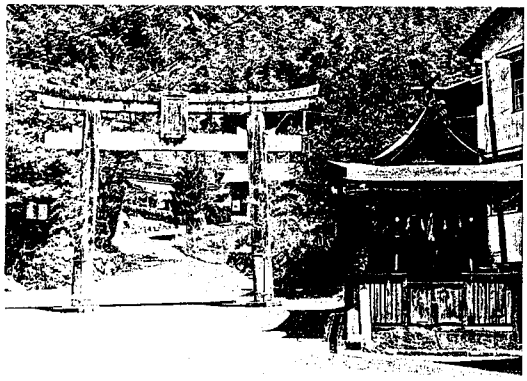
そのほか、わが家（社宅ですが）の裏庭とも言える箕面の山々や北摂（能勢、丹波、猪名、宝塚）の山々などがある。今から思うと若く体力あった時に行けばよかったと思う山々が沢山ある。とくに関西の最高峰である大峰山＊/奈良の弥山（みせん）、八剣山（1914）には計画はあったが実現できなかったのが心残りである。（注）＊深田久弥著「日本百名山」記載されている山。

全体に標高的にはそんなに高い山はないが、まさに”山高きをもって尊からず”で皆それなりに個性がある貴重な山々である。地域的にはなぜか滋賀県、三重県の山が多いが、とくに理由はないがたまたまそうなったものである。

上記の思い出に残る主な山行すべてを記すことはすでに忘却の彼方へ行ってしまった部分も多くやめにし、一部について写真を主体に記すことに



雪彦山の山容



雪彦山入山地点の風景

雪彦山岸峰

する。

まず雪彦山（せっぴこさん）は3度ほど行った好きな山であった。雪彦山は、英彦山（ひこさん）/福岡県と弥彦山（やひこさん）/新潟県とともに日本三彦山として、古くは修験者の行場として知られている。小生はたまたま機会があってこの三彦山とも登っている。蛇足ですが、三彦と言えば当工業会事務局職員にも新免雅彦氏、安中和彦氏、堀切俊彦氏の3人の彦が居られる。さらに蛇足ながら彦は男子の美称（広辞苑）で女性の姫にあたる。まさに名は体をあらわすのとおり、い

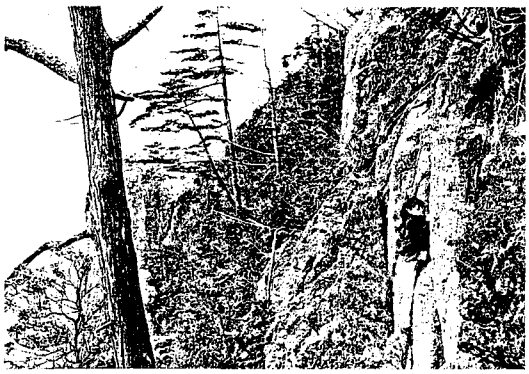
雪彦山岸壁での岩トレする人

雪彦山山頂の昼食風景

ずれも立派な紳士の方ばかりで、小生などは日頃大変お世話になっています。

雪彦山は雪彦三山の主峰「洞ヵ岳」のことであり、標高は然程（さほど）ではないが岩峰のそそり立つ険しい山道は多分にアルプス的である、これも好きな理由である。登山道から岩壁にとりつ

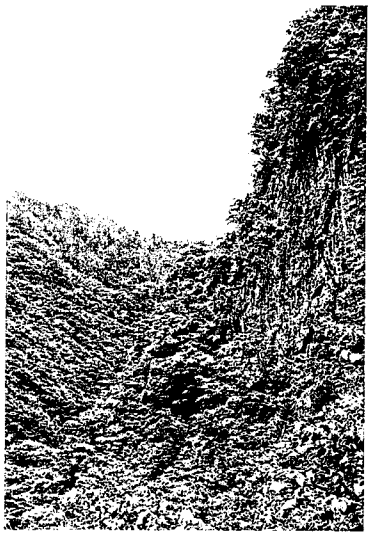
雪彦山山頂の祠



雪彦山登山路（カニの横這地点）

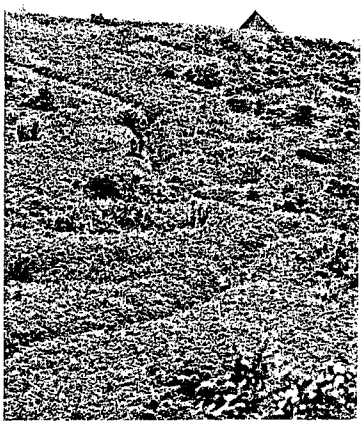
いて岩トレをしている光景がみられる。雪彦山から峰山、砥峰高原縦走も捨て難い魅力的なコースである。ある時などは、友人と３人で山行したとき、山頂での酒が過ぎたのか、すっかり下山ルートと思いこみ、入山地点と反対側の村に下りてしまったことがある。なにせ田舎の山の中のこと交通の便がなく、漸く個人タクシーの看板のある農家を見つけ、お願いしたが運転手であるご主人はいま畑にでて留守とのことで、早速奥さんに呼びに行ってもらって、やっとひと山越えた入山地点に置いた車までタクシーで戻ったことがある。もし、タクシーが見つからなかったら、夜中歩くしかなかった、まさに天国と地獄を経験するところでした。ベテランの３人がいながらまったく恥ずかしい限りで、人に言えたことではない。思い込みの危険を知り、反省の山行でした。以後山では、頻繁に地図を見るようにしている。また、下山途中のこと杉林の中を歩いていると突然目の前に木を切り開いた空間が現れ、そこは一面に杉の木の枝を切って敷き詰められた場所で、何だろうと思い敷き詰められた枝をめくって見ると、なんと大きな生椎茸があちこちからでてくるではないか、ここは生椎茸の栽培地なのだとすぐ理解できた、いくつか拾って帰り酒の肴にしたらとふと思ったが良心が咎めてやめた。山に登る者にはそんな悪者はいない。普通、椎茸の栽培は椎、栗、櫟（くぬぎ）などの木を伐ったほたぎ（榾木）に菌を植え付けて栽培しているが、これは初めて見る珍しい光景だったことを覚えている。

つぎは霊仙山、この山は彦根の東部、鈴鹿山系の再北端に位置し伊吹山と向かい合う緩く伸びやかな石灰岩でできた山である。山頂は広く熊笹、ススキの大草原で３６０°の眺望は素晴しい。北に伊吹山、西に琵琶湖が南に鈴鹿の山々が連なっており、麓には滋賀県立の醒ガ井養鱒場がある。この山の思い出は何といっても怪我人がでたことである。私の山行の中で負傷者がでたのは、後にも先にもこれが初めてのことであった。それは１１年前の６月１８日山行の下山途中で起きた。山頂にある立派な避難小屋の前での恒例の宴会が天気と眺望の良さについつい予定時間を大幅に過ぎてしまい、この後駅前で反省会の予定もありで、私が先頭に急いで下山することになり、下り一方の道を快調に下って行った。とくに難しい道ではないのであまり後続を気にかけずマイペースで小走りに下って行った。１時間ほど経った頃か、後ろから来る筈の仲間が全然姿を見せないのでおかしいなと思いながらもそのうち追い付くだろうと先を急いでいたところ、後ろから仲間のＵさん（女性）が走るように下りてきて、Ｋさんが足を怪我をして歩けないことを告げた。話を聞いて見るとどうやら骨折している様だ。現場にはあと男性が２人と女性ひとり残っているがそれでは大人の男性ひとりをとても下ろせない。山道も細く人ひとり通るのがやっとであり、そろそろ暗くなりかけてきたこともあり、私が戻っても助けにはな



霊仙山登山路の景色

霊仙山登山路にある滝



霊仙山山頂付近（熊笹とススキに覆われている）

らないので、私とUさんで急いで下山し救援を呼ぶことにした。どれほどか忘れたが３０ないし４０分ほど駆けにかけ麓のたしか土産物店か食堂があったのでそこの店主に事情を話し救援をお願いしたところ、地元の消防団の方が数人、担架を用意して集まってくれたので、Uさんには救急車

霊仙山山頂のなだらかな風景

の連絡を頼み、私は消防団の方を案内し再び現場へ戻った。怪我の状態はかなり悪くとても歩ける

霊仙山山頂での筆者(中央)と仲間(仲間の一人が撮影)

状態ではないのは見ただけで歴然としていた。原因は雨水により溝状にえぐられた道を横切ってにむき出しで張り出し宙に浮いてあたかも罠のような木の根ッ子のところに足を突っ込み、上体が前に倒れたためすねの部分を骨折したらしい。あたりも暗くなりかけており見にくかったのだろう。救援隊の方のお陰で、救急車まで無事運ぶことができ、東彦根の病院に送り込むことができた。我々だけでは一晩かかってもどうにもならなかっただろう。当面の処置が片付き一段落したときは翌日になっていた。それにしても、同じ山道を駆けて往復するなどいまだかってなく、二度とやれないだろう。

このような予想外の事故の発生でみんなが楽しみにしていた下山後の宴会反省会はすっとんでしまった。しかし、いつも言われていることであるが、過去、著名な登山家の遭難はたいてい下山の途中で起こっていることが多いことからも、山は登りより下山時に注意を要することを身を持って経験した貴重な山行であった。それにしても、大人ひとりを運ぶのは大変なことであるとつくづく思った。Kさんの脚にはまだステンレスの棒が入っていることと思いますが、今は元気に活躍されている。

(to be continued)